

<13-14p.never published>

- 15… 各社近着外国映画紹介：『古着屋クーガン Old Clothes』『極北に吼ゆ A Hero of the Big Snows』『お化粧兵隊 The Love Toy』『海馳ける猛虎 The Sea Tiger』『単騎奮迅 Somewhere in Sonora』『初恋ハリイ Long Pants』『モダンガールと山男 The Runaway』『ニウ・ヨーク New York』『誉れの警官鬼神退治 The Pride of Sunshine Alley』『ギブソン大手柄 Hey!Hey!Cowboy!』『猫とカナリヤ The Cat and the Canary』『緋文字 The Scaret Letter』
- 20… 小さき画報
- 22… 各社試写室より『桃色女白浪 Venus of Venice』『イット It』『キャバレエ Cabaret』・「映画随筆」
- 23… 『芸術と手術 Orlac's Hands』
- 24… 『ニュー Nju』（リマックス）
- 26… 『ドン・カルロス Carlos Und Elisabeth』
- 27… レスカープラ（高田勝訳）「映画製作の実際（8）」・「邦楽座グラフ」
- 29… 無題欄・武田忠哉訳「色彩音楽（上）」・「武蔵野館」・「映画評論」
- 30-1…『曲芸団 Variete』（ウーファ）
- 30-2…「曲芸団批評抜粋」
- 31… 「東西映画株式会社 『曲芸団』全関西配給権獲得」
- 32… 「1927年度エフ・ビー・オー映画45本」
- 33… 主要外国映画批評：『猫の寝巻 The Cat's Pajamas』（飯島正）『サタンの嘆き Sorrows of Satan』（北川冬彦）『ハレムの貴婦人 The Lady of the Harem』（北川冬彦）『相縁奇縁 Syncopating Sue』（清水千代太）『大学のブラウン Brown of Harvard』（岩崎昶）『愛の投縄 Rustin' For Cupid』（内田岐三雄）『映画の都に出でて Broken Hearts of Hollywood』（清水千代太）『悲恋舞曲 The Night of Love』（田村幸彦）『第四の誠律 The Fourth Commandment』（北川冬彦）『鉄拳一斉射撃 A One Man Game』
- 35… ヴァリエテ談話会（岩崎昶・飯島正・古川緑波・内田岐三雄・鈴木重三郎・北川冬彦・芳原薫・田中三郎） <37-40p.never published>
- 41… 『落城の秋』（日活）
- 42… 『慈悲心鳥』（日活）
- 43… 『漕艇王』（日活）
- 44… 『照る日くもる日第四篇』（日活）
- 45… 『猫とカナリヤ The Cat and the Canary』（ユニヴァーサル・ジュウエル）
- 46… 『飛行夜叉 前中後篇』『ギブソン大手柄 Hey! Hey! Cowboy』
- 47… 『港の灯』『弱虫』
- 48… 『美しき奇術師』
- 49… 各社近作日本映画紹介：『港の灯』『弱虫』『飛行夜叉 前篇』『落武者』『狐火』『流転』『五色の魂』『からくり娘』『恋慕夜叉』『春の雨』『人玉お半』『復讐鬼』『浄魂』『浪士』『鉄拳縦横』『三界を彷徨ふ女』『小半と惣七』『紺屋高尾』
- 54… 『名剣』（帝キネ）
- 55… 『枯すゝき』（帝キネ）
- 56… 「諸口十九・筑波雪子 私事ながら独立」 <57-60p.never published>
- 61… 主要日本映画批評：『新珠』（芳原薫）『剣』（芳原薫）『妾の勇者』（芳原薫）『雲雀』（内

- 田岐三雄『閃影』(飯島正)『仇討奇縁』(北川冬彦)『閻魔帳抜書』(北川冬彦)『兄貴』(芳原薫)『乱軍』(北川冬彦)『椿姫の歌』(水町青磁)
- 63… 日本映画の画報  
 64… 「映画往来」  
 65… 『白虎隊』(松竹)  
 66… 『村の花嫁』『本郷秘話からくり娘』(松竹)  
 67… 『盲刃』『剣涙』(松竹)  
 68… 『悲願千人斬』(松竹)  
 69… 日本各社撮影所通信・「日本映画」  
 71… 寄書欄:原田虹二「我等の海」の感想・壇茂都緒「昭和時代から」・菅見恒夫「ジェームス・クルーズ論序説」・平井房雄「椿姫」・高橋信男「ザ キッド・ブラザー」  
 72-1… 『紺屋高尾』(マキノ)  
 72-2… 『荒神山』(マキノ)  
 73… 『雪の夜話』『道中悲記』(マキノ)  
 74… 『恋の守備兵』(マキノ)  
 75… 各地主要常設館番組一覧表・F・U生「下関通信」  
 77… ファンの趣味欄・青き悲鳴・赤き悲鳴  
 78… 寄贈雑誌紹介欄・「大日本ユニヴァーサル」・「マルベル堂本店」・編集後記  
 79… 「光映社映画部会員大募集」  
 81… 『出世水兵 Let It Rain』(パラマウント)  
 82… 『神我に20 銭を賜ふ God Gave Me 20¢』(パラマウント)  
 84… 『モダンガールと山男 The Runaway』(パラマウント)  
 85… 『ロンドン London』(パラマウント)  
 86… 『弥次喜多野球の巻 Casey at the Bat』(パラマウント)  
 88… 『森の男 Man Of the Forest』(パラマウント)  
 89… 『好いて好かれて Paradise for Two』(パラマウント)  
 90 (背表紙) …『不良老年 The Ace of Cads』(パラマウント)

6月11日

264号



5… 「映画往来」

(表紙) …マッジ・ベラミー嬢

- 2… 『初恋ハリヤー Long Pants』(ファースト・ナショナル)  
 2-1… 『紅草子 An Affair of the Follies』  
 (ファースト・ナショナル)  
 2-2… 『最後の栄冠 Forever After』『死線を潜りて The Great Deception』(ファースト・ナショナル)  
 2-3… 『猫とカナリヤ The Cat and the Canary』  
 4… 『毒牙 The Craw』『別名副牧師 Alias, the Deacon』『驀進デニー Fast and Furious』『後家さん御用心 Beware of Widows』『同じ穴の貉 Cheating Cheaters』『高原王 Prairie King』

- 6… 時報・パラマウント新着映画・フォックス新着映画  
7… 海外通信 (独逸・仏蘭西・米通信)  
8… 1927-28年度 パラマウントの陣容  
9… 『肉弾トムソン Regular Scout』(FBO)  
10… 『映画の都に出でて Broken Hearts of Hollywood』(ワーナー)  
11… 『恋は曲者変装自在 Oh! What a Nurse!』(ワーナー)  
12… 『第一曲馬団 Bigger Than Barnums』(FBO)  
13… 各社近着外国映画紹介: 『死線に立つ A Man Must Live』『金髪か黒髪か Blonde or Brunette』『神我に二十銭を賜ふ God Gave me Twenty Cents』『嵐の花嫁 Bride of the Storm』『ジョニー遠征 All Abroad』『死線を潜りて The Great Deception』『怪巡洋艦 エムデン The Emden』『美しき婦人達 Pretty Ladies』『熱血の行進曲 Set Free』  
17… 『怪巡洋艦 エムデン The Emden』  
20… 『女性春秋』(エメルカ)  
21… 無題欄: ルドルフ・クルツ (岩崎昶訳) 「表現主義と映画(7)」・武田忠哉訳「色彩音楽(下)」・「映画評論」  
23… 各社試写室より: 『夜会服 Evening Clothes』『想ひ叶ふて Orchids and Ermine』  
24… 小さき画報  
26… レスカープラ (高田勝訳) 「映画製作の実際(9)」  
28… 「日本映画」  
29… 『明眸罪あり』(メトロ・ゴールドウィン)  
30… 『プレティアーレディース Pretty Ladies』(メトロ・ゴールドウィン)  
<31-32p. never published>  
33… 主要外国映画批評: 『六人の嫌疑者 The Pleasure Buyer』(木村千疋男) 『珍妙楽天王 The Wrong Mr. Wright』(鈴木重三郎) 『我等の海 Mare Nostrum』(芳原薫) 『ロンドン London』(内田岐三雄) 『令嬢無銭旅行 Stranded in Paris』(内田岐三雄) 『恋愛保健 The Love Thrill』(北川冬彦) 『単騎奮迅 Somewhere in Sonora』(清水千代太) 『初恋ハリー Long Pants』(清水千代太)・「パラマウント」・「武蔵野館」  
35… 『城を守る人々』(日本映画プロダクション)  
36… 『妖刀異変大捕物』(日本映画プロダクション)  
37… 『板割の浅太郎』(松竹)  
39… 『乱れ咲く花』(帝キネ)  
40… 『浮世車』(日活)  
41… 『落城の秋』(日活)  
42… 『流転』(日活) <43-44p. never published>  
45… 『道中悲記』(マキノ)  
46… 『刀をぬいて』『敗残者』『踊る靈魂』(マキノ)  
47… 『矢倉一やぶすまー』(マキノ)  
48… 『いろは仮名四谷怪談』『敵討鏝諸共』(マキノ)  
49… 各社近作日本映画紹介: 『板割の浅太郎』『浮世車』『武士なればこそ』『不知火』『血櫻峠』『剣難女難』『暗の中の顔』『愛の讃歌』『大名五郎蔵』『子〇悩』『闇を行く者』『萬花地獄』『旅役者』『悲願千人斬』『親孝行』『田舎の伊達男』・「神戸映画堂」

- 54… 『白虎隊』(松竹)  
 55… 『毒唇』(松竹)  
 56… にほんもの画報  
 57… 主要日本映画批評:『椿姫』(内田岐三雄)『生霊』(芳原薫)『死線突破』『真珠婦人』  
 (鈴木重三郎)『すね者』(北川冬彦)『やきもち』(鈴木重三郎)『国境の唄』(北川  
 冬彦)『松平長七郎』(鈴木重三郎)『蛟龍』(山本緑葉)『心中女人堂』(山本緑葉)  
 『小鳥で儲けて』(山本緑葉)『新野崎』『小猿七之助』(水町青磁)『倉橋傳助』(水  
 町青磁)『三界を彷徨ふ女』(水町青磁)『ギャマンの酒』(水町青磁)『街道』(芳原  
 薫)『拳骨先生』(芳原薫)『毒龍』(芳原薫)  
 60… 日本各社撮影所通信・「マルベル堂本店」  
 62… 寄書欄:岸松雄「次に来るもの前に(1)」・筈見恒夫「椿姫」・松本栄一「ロイド  
 とキートン」  
 64… 封切外国映画索引(昭和2年5月中各号批評分)・「大正15年度封切映画索引」  
 65… 各地主要常設館番組一覧表・豊生「札幌通信」  
 67… ファンの趣味欄・「キネマ旬報社企画部」  
 68… 寄贈雑誌紹介欄・「映画の夕 京大・医大・三高ムービーリーグ」・「未封切欧州映画譲  
 渡し」・編集後記  
 69… 『死線に立つ A Man Must Live』(パラマウント)  
 70… 『ニューヨーク New York』(パラマウント)  
 71… 『金髪か黒髪か Blonde or Brunette』(パラマウント)  
 72… 『青春の喜び Fascinating Youth』(パラマウント)  
 73… 『弥次喜多野球の巻 Casey at the Bat』(パラマウント)  
 74(背表紙)… 『海の荒鷲』(パラマウント)

6月21日 265号



- (表紙)…エヴリン・ブレント嬢  
 2… 『珍婚世界漫遊 All Aboard』(ファースト・ナショナル)・  
 「「ファースト・ナショナル」第2号発売中」  
 3… 『極楽島奇譚 Paradise』(ファースト・ナショナル)  
 4… 『男見るべからず Ladies at Play』『死線を潜りて The  
 Great Deception』(ファースト・ナショナル)  
 5… 「武蔵野館開館第七周年記念特別興行」  
 6… 時報・各社新着映画  
 7… 海外通信(英国・米国通信)・「映画脚本 彼を繞る五人の女」  
 8… 1927-28年度 メトロ・ゴールドウィンの陣容・1927-28年  
 度ファースト・ナショナルの陣容  
 9… 『昨日への道 The Road to Yesterday』(ビーディーシー)『街の恋人形』  
 10… 『紐育恋慕双紙 Hell's Highroad』『街の恋人形』  
 11… 『爆笑七日間 Seven Days』(ビーディーシー)『街の恋人形』  
 12… 『恋の修羅城 The Coming of Amos』『街の恋人形』  
 13… 『闘ふ青春 Drums of Jeopardy』(ツルーアート)『文化娘大事件 Fighting The

- Flame』(コロンビア)『街の恋人形』
- 14… 『誉れの警官鬼神退治 Pride of Sunshine Alley』(パッド・バースキー)『速力大王 Speed Madness』『冒険記者 Hollywood Reporter』(ハーキュレス)『大北の狼 The Northern Code』(ジェリー・ジー・メイヤー)『街の恋人形』
- 15… 各社近着外国映画紹介:『出世水兵 Let it Rain』『チョビ髻七面騒動 The Potters』『男見るべからず Ladies at Play』『極楽鳥奇譚 Paradise』『白銀の財宝 The Silver Treasure』『弥次喜多野球の巻 Casey at the Bat』『青春の喜び Fascinating Youth』・『古着屋ターガン Old Clothes』
- 19… 『〔仮名〕後家さん御用心 Beware of Widows』(ユニヴァーサル・ジュウエル)『大学生活 The Collegians』(ユニヴァーサル)
- 20… 『毒牙 The Craw』(ユニヴァーサル・ジュウエル)『猫とカナリヤ』
- 21… レスカープラ (高田勝訳)「映画製所の実際(10)」
- 23… 無題欄:武田忠哉「〔ヴァリエテ〕のエミール・ヤニングス」・武田晃「〔ヴァリエテ〕の感想」
- 25… 各社試写室より:『怪巡洋艦エムデン The Emden』『音楽教師 The Music Master』
- 26… 小さき画報
- 28… 「映画往来」
- 29… 「映画物語『怪巡洋艦 エムデン The Emden』(エメルカ)」
- 37… 主要外国映画批評:『最後の戦線 The Last Frontier』(北川冬彦)『飛鳥の如く A Man Four Square』『昨日への道 THE Road To Yesterday』(鈴木重三郎)『不良老年 The Ace of Cads』(木村千疋男)『好いて好かれて Paradise For Two』(鈴木重三郎)『女房ゐぬ間に When the Wife's Away』(木村千疋男)『最後の栄冠 For ever After』(清水千代太)『芝居の世の中 Everybody' Acting』(田村幸彦)『誉れの警官鬼神退治 The Pride of Sunshine Alley』
- 39… 寄書欄:岸松雄「次に来るものの前に(2)」・嵯峨野龍雄「よしなしごと二つ三つ」・原田虹二「半歳を送る」・鴨川緑三「僕の決算」
- 41… 『曲芸団 Variete』(ウファ)
- 42… 『六人の嫌疑者 Pleasure Buyers』(ワーナー)
- 43… 『浮世草』(日活)
- 44… 『地雷火組』(日活)
- 45… 『流転』(日活)
- 46… 『東洋武侠団』(日活)
- 47… 『白虎隊』(松竹)
- 48… 『旅役者』『子に泣く』(松竹)
- 49… 『毒唇』『恋慕夜叉』(松竹)
- 50… 『悲願千人斬』(松竹)
- 51… 各社近作日本映画紹介:『勤皇の血』『飛行夜叉中篇』『最後の一艇身』『9番倉庫』『雨』『閃く意識』『恋の四千両』『学生五人男(恋愛篇)』『女盗縮緬頭巾』『鬼 第二篇』『妖刀異変大捕物』『仇討違ひ』(松竹)『女夫星』『当世気質』『子に泣く』『異国の娘』『馬鹿らしき哉』『旅芸人』『稲妻』『隠密』『照る日くもる日(最終篇)』『討たれぬ仇』『田宮坊太郎』・「マルベル堂本店」
- 57… 日本各社撮影所通信・「日本映画」 <59-60p. never published>

- 61… 『敗残者』『闇を行く者』『敵討鎧諸共』『神州天馬侠』（マキノ）  
62… 『仮名手本忠臣蔵』（マキノ）  
64… 『矢倉』『いろは仮名四谷怪談』（マキノ）  
65… 『梁川庄八』（帝キネ）  
66… にはんもの画報  
67… 主要日本映画批評：『影武者』（山本緑葉）『平手造酒』（山本緑葉）『柳生又十郎』（山本緑葉）『蛟龍』（山本緑葉）『勝利の鍵とは』（山本緑葉）『飛行夜叉 前篇』（芳原薫）『弱虫』（芳原薫）『武士なればこそ』（北川冬彦）『阿里山の侠児』（鈴木重三郎）『凱旋少年』（芳原薫）『浄魂』（鈴木重三郎）  
69… 『剣難女難』（東亜）  
70… 『閃く意識』『血櫻峠』（東亜） <71-72p. never published>  
73… 各地主要常設館番組一覧表・澤田武人「京城映画界雑信」  
75… ファンの趣味欄・キネマ旬報社企画部  
76… 寄贈雑誌紹介欄・「大正15年度封切り映画索引」・「未封切欧州映画譲渡し」・編集後記  
77… 『百貨店 Love EM and Leave Em』  
78（背表紙）… 『弥次喜多野球の巻 Casey at the Bat』

## 昭和戦前期『キネマ旬報』復刻 編集後記

佐藤 洋

このたび文生書院の手で昭和戦前期『キネマ旬報』が復刻再版され、このようにお届けすることが可能になった。1919年創刊の『キネマ旬報』は、今年で創刊90周年を迎え、日本映画研究の重要な基本文献でありつづけている。しかし、国際的な日本映画研究の高まりの中にあっても、戦前の『キネマ旬報』を全巻揃えた図書館・研究機関は皆無である。その現状にあらがって、多くの方が手にとって利用できるよう、今回の復刻版が製作された。すでに、創刊から1926年までの大正期『キネマ旬報』および、雑誌統制後の1941年から1943年までの『映画旬報』は、それぞれ雄松堂・ゆまに書房が復刻再版を行っているので、今回の1927年から1940年までの復刻によって、戦前の『キネマ旬報』のすべてが甦る。ここに昭和戦前期『キネマ旬報』復刻の特徴および製作経緯を記録しておきたい。

これまでに復刻された時期と比較して、今期（1927～1940年）の『キネマ旬報』の復刻を困難にしてきたのは、折り込み広告の存在だった。年を追うごとに量が増え、デザイン・色彩等の質的な工夫が凝らされていく折り込み広告は、1925年前後から『キネマ旬報』が採用した<sup>1</sup>。そして、ちょうど今回復刻する1927年頃から折り込み広告の量は急激に増大する。その煩雑さと以下に記す特徴のゆえに、折り込み広告が、復刻に際して一番のつまずきの石だった。

つまり、1925年以前にも『キネマ旬報』は映画作品の広告を掲載しているが、折り込み広告の特徴は、映画製作・配給会社が作成した広告を、製本する段階で『キネマ旬報』本誌に折り込むことにある。結果的に、『キネマ旬報』が作成にはタッチしないので、折り込

み広告にはページ数が記載されない。おそらく『キネマ旬報』と各会社は、何ページの広告をどこに折り込むかを事前に相談しており、本文のページ数は、折り込み広告のページ数を想定して記載されている。だが、折り込み広告のページ数は、つねに想定を裏切ってきた。想定した数より広告ページ数が多いこと、少ないことは当たり前で、想定していなかったであろう18ページと19ページの間に突然小さな折り込み広告が挿入されていたりもする。さらに、折り込み広告は各会社が意をつくして工夫した、美術的にも美しいものである。ページ数も記載されていない。きれいに切り取れば、映画ポスターやプログラム同様に、見て楽しむことが可能である。そして、実際にそのようにして切り取った方が多かったようだ。ページ数が記載されていない折り込み広告がきれいに切り取られてしまっただけでは、どこから何がどれだけ切り取られたかを確かめるのが困難である。

このような事情で、どこに何ページの折り込み広告が存在しているか、それを確かめるのが復刻の一番の課題となった。この折り込み広告問題に対して私たちは、単純ではあるが、現存する数セットの『キネマ旬報』を比較する方法をとった。つまり、文生書院およびキネマ旬報社所蔵の復刻原本をベースにして、早稲田大学文学部・早稲田大学演劇博物館・川喜多記念映画文化財団(2セット)・東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵の合計5セットの『キネマ旬報』を比較することで、折り込み広告を含めた総ページを確認した。この比較によって復刻原本の不備・欠落が明らかになった場合は、主に監修者である小松弘所蔵の『キネマ旬報』によって欠落を補った。もちろん、原本および確認した5セット全てから切り取られた折り込み広告もあったかもしれない。それは本復刻版が引き受けねばならない限界である。お気づきになられた方は、どうかご教示いただけると幸いです。

ただし、私たちは国際的な映画研究の現状に照らして、折り込み広告の資料的価値を重視している。文生書院の須藤らの技術で、折り込み広告をオリジナルに近い色彩で復元し、引用しやすいように、復刻版独自のページ数を記載した。さらに、折り込み広告も含めた総目次を作成した。

復刻版のページ数は、オリジナルのページ数を尊重した原則によって記載している。たとえば、本文15ページと18ページの間には6ページの折り込み広告がある場合。想定された16・17ページを後ろの2ページの折り込み広告に記載し、最初の4ページには15 - 1・15 - 2という具合に記載する。つまり、折り込み広告が挿入された後ろのオリジナルページ数から逆算して、ノンブルを附してある。これは、オリジナルのページ数を尊重しつつ、ノンブルを附す際に誤りがないように、という技術的な理由を優先しての原則である。また、本文15ページと18ページの間に16・17ページの折り込み広告が想定されながら、実際には折り込まれなかった場合。その場合は、総目次に不在を < never > と書き込んだ。

このように比較・復刻版ページ数の追加・総目次作成という3つの方法によって、復刻の一番の問題でありながら、今回の復刻版の重要な特徴である折り込み広告の復元に対処した。

編集後記として特筆すべきは、以上の折り込み広告問題である。ただし、このように、煩雑でコストのかかる折り込み広告を含んだ復刻版の製作は、文生書院の複製技術とオンデマンド出版という販売方式があって初めて可能となった。そこで、これまでもいく度か企画が持ち上がっては、主として折り込み広告問題で頓挫していた『キネマ旬報』復

刻版が、この度いかにして製作されたか、その経緯も簡単に記しておきたい。

復刻企画が正式に持ち上がったのは2007年3月。ちょうど、監修者である牧野守の映画資料(マキノコレクション)を、牧野守と佐藤洋がコロンビア大学へと発送し終わる頃に、牧野宅にかかってきた電話が企画のはじまりだった。電話の主は稲垣書店店主の中山信行さん。中山さんは映画専門の古書店を営んで、映画文献資料に精通しており、映画史研究者に豊富な資料を提供してきた。その中山さんが収集した昭和戦前期『キネマ旬報』原本の存在と、未復刻の現状を知った中山さん旧知の文生書院社長の小沼良成が、復刻版製作を企画したのである。文生書院はすでに社会科学・文学関係の復刻版製作の実績があり、映画史的・美術的に価値の高い『キネマ旬報』の復刻に興味を持ち、また復刻をカラーで実現する技術も持っていた。そこで、長年映画資料の復刻にたずさわって来た牧野を、中山さんが小沼に紹介したのが先の電話だった。

昭和戦前期『キネマ旬報』の復刻を、それまでも企画しては頓挫していた牧野は協力を快諾。ただし、長年の闘病によって以前のような復刻に際しての実務をこなすことが困難であると判断し、編集等の実務を担当する者として佐藤洋が指名された。また、無声映画史の専門家であり、豊富な映画資料のコレクションを擁する早稲田大学教授小松弘には、監修者として復刻に携わっていただくこととなった。

このようにして復刻版製作の体制がととのい、植草信和さん(角川文化振興財団)やキネマ旬報社の青木眞弥さんの協力を得て、キネマ旬報社から復刻版製作のご了承をいただくこともできた。そして、前記したような折り込み広告問題に対する編集作業を佐藤洋が行ううちに、2009年現在となった。その間にも様々の紆余曲折があった。『週間読書人』(2008年11月21日号)は『キネマ旬報』復刻の特集記事を作成してくださった。推薦の言葉をお寄せくださったシナリオライターの山田太一さんと映画監督の篠田正浩さん、そして『週間読書人』編集の明石健五さんには、よくしていただいた。山田さん、篠田さんの推薦の言葉に加えて、映画評論家で詩人の杉山平一さん、美術監督の木村威夫さん、女優の有馬稲子さん、日本映画研究者のアーロン・ジェローさん、アベ・マーク・ノーネスさんにすてきな文章をつくっていただき、広告の小冊子を作成したのは2009年の3月のことである。きれいな小冊子をデザインしてくださったのは、杉本直子さん。大阪在住のアニメーション史研究者である渡辺泰さんには、総合解説の執筆をご快諾いただいた上に、編集上の様々な相談にのっていただいた。他にもたくさんの方のご助力をえて、なんとか第一回の配本にたどりついた。復刻版編集のための大判の作業ノートを、この後記を書くために机に置いているが、書類が折り込まれて分厚くなったノートは3冊にもなっている。汚れたノートを見ると、夏のあつい日にせまい部屋で『キネマ旬報』をひたすらに繰りながら、ページ数のデータを独りでつくっていたことをふと思い出す。500冊近い量を復刻するにはまだ数年がかかるだろう。次回配本からは総合解説を附し、復刻版を読解するための言説の場もつくっていく予定である。どうかこれからもご助力いただけますと幸いです。

第一期の復刻版製作に最終的な区切りがついたのは、2009年5月23日。当日、城西国際大学で日本映画についての国際的な討論の場が設けられ、牧野・小沼・佐藤は打ち合わせと宣伝と勉強のために来場した。200人近い来場者は、アメリカ・フランス・フィンランド等々、世界中からやってきていた。様々な討議を聞きながら、世界中に『キネマ旬報』の復刻版が跳んでいって、今日ここに集っているような人たちが読み、感じ、考えるようになるとどんな風だろうと夢に見た。『キネマ旬報』は何をなしたか?それはこれから考えられるべき問題である。けれど、少なくとも、当時のキネマ旬報社主、田中三郎らの仕事の



あとには、どこかいいにおいが残っている。私たちの復刻版製作の仕事は、映画史研究の進展を目指すものだけれど、『キネマ旬報』の青い活字がのこしたそのにおいを、もう一度世界にひろめられたらどんなによいだろう。この願いが、私の復刻版製作の原動力だった。どうか様々な場所で、いろいろな角度からご覧ください。

ご協力いただいた早稲田大学演劇博物館・川喜多記念映画文化財団・東京国立近代美術館フィルムセンターには、あらためて厚く御礼を申し上げます。

<sup>1</sup> キネマ旬報社の同人でもあった岸松雄は、キネマ旬報社社主田中三郎についての評伝を書く中で、折り込み広告について次のように述べている。「後年、旬報名物となった折り込み広告は、ドイツ映画「ジークフリード」をイリス商会が輸入したとき、宣伝をやっていた須田鐘太（後の大映重役）が創案した三色刷りの折り込みだ。初めてのことで広告料の見当がつかず、製作実費の倍に見つもって、2頁20円でひきうけてしまった。この折り込みが評判となって、広告価値絶大とわかると、各社とも競って折り込みを採用した」（岸松雄「田中三郎」『人物・日本映画史』ダヴィッド社、1970、pp.162 - 163）。『ジークフリード』の日本封切は1925年3月20日。その前の『キネマ旬報』を調査してみると、1925年1月1日181号の折り込み広告を岸が想起していることは仮定できる。ただし、他にも折り込み広告は存在し、181号の折り込み広告を最初のものとは断定することはできない。しかし、1925年1月1日号前後から折り込み広告制度がスタートしたことは間違いのないだろう。他にも、戦前の『キネマ旬報』については、雄松堂が復刻した大正期『キネマ旬報』における、岩本憲児および牧野守の総合解説を参照。

編著者紹介:

佐藤 洋 1980生まれ。現在早稲田大学文学研究院ドクターコース在学中

#### 復刻版の頁数原則について:

復刻版のページ数は、オリジナルのページ数を尊重した原則によって記載している。たとえば、本文15ページと18ページの間には6ページの折り込み広告がある場合。想定された16・17ページを後ろの2ページの折り込み広告に記載し、最初の4ページには15 - 1・15 - 2という具合に記載する。つまり、折り込み広告が挿入された後のオリジナルページ数から逆算して、ノンブルを附してある。これは、オリジナルのページ数を尊重しつつ、ノンブルを附す際に誤りがないように、という技術的な理由を優先しての原則である。また、本文15ページと18ページの間には16・17ページの折り込み広告が想定されながら、実際には折り込まれなかった場合。その場合は、総目次に不在を < never published > と書き込んだ。更に頁数の誤植等は訂正した頁数を記載し、< misprinted > と明記した。

(復刻版)

【キネマ旬報】 総目次 (作品/論文/広告一覧)

---



2009年6月29日 発行

第1回配本 第249-265号 全17冊  
定価 本体76,000円 (税別)

監修  
編集  
発行者  
印刷・発行所

小松 弘・牧野 守  
佐藤 洋  
小沼 良成  
株式会社 文生書院  
〒113-0033 東京都文京区本郷6-14-7  
Tel (03) 3811-1683 Fax (03) 3811-0296  
e-mail: info@bunsei.co.jp

乱丁・落丁はお取り替え致します。

---

Printed in Japan